

## 研究成果情報

[成果情報名] アイガモの飼料給与方法の違いが発育性及び飼料費に及ぼす影響

[要 約] アイガモを、水田同時作の場合と同様の発育曲線となるように10日齢から56日齢まで制限給餌で飼育し、その後4週間高蛋白・高エネルギー飼料を自由給餌させたところ、84日齢まで自由給餌した場合と同様な発育成績が認められ、全体の飼料摂取量は少なく抑えられる。

[キーワード] アイガモ 代償発育 制限給餌 飼料費

[担 当] 山梨県畜産試験場 養鶏科

[連絡先] 055-273-6441

[区 分] 関東東海北陸・中小家畜

[分 類] 技術・参考

-----  
[背景・ねらい]

水禽はアイガモ農法などの普及で飼育する農家が増加している傾向にあるが、水田放飼後の肉利用に適した肥育方法は確立されていない。水田放飼中の水禽は飼料の摂取量が抑えられているため引き上げ後の肥育で一定の代償発育が認められるが、発育ピークを過ぎているため飼料効率は悪く、飼料代がかさむおそれがある。今回は、水田放飼を想定して制限給餌を行いその後高蛋白・高エネルギー飼料を自由給餌した場合の飼料効率・正肉歩留について調査した。

[成果の内容・特徴]

- ・アイガモを56日齢まで水田同時作と同様の発育となるように飼料制限し、56日齢以降は高蛋白・高エネルギーの飼料を自由給餌した場合（表-1）、自由給餌区とほぼ同様な発育が認められた。（表-2・図-1）。
- ・84日齢までの1日1羽あたりの飼料摂取量は、自由給餌区では126g、制限給餌区では107.5gとなり、制限給餌区の方が、飼料摂取量が抑えられ飼料費が安くなった（表-3、図-1）。
- ・制限給餌区では、自由給餌区と比べて腹腔内脂肪、肝臓重量および筋胃重量が大きくなる傾向があった（表-4）。また、肝臓の脂肪含量も制限給餌区の方が増える傾向があった（表-4）。
- ・ムネおよびモモの正肉歩留は自由給餌区で32.4%、制限給餌区で33.5%だった（表-4）。

[成果の活用面・留意点]

アイガモ水稲同時作の農家において、水田放飼中および引き上げ後の肥育効率のよい飼育方法として応用できる。

[具体的データ]

表-1. 肥育方法

(n = 15羽)

	0-10日齢	10日齢-56日齢	56日齢-84日齢
給与飼料	幼雛用飼料	大雛用飼料	ブロイラー後期飼料
自由給餌区	自由給餌	自由給餌	自由給餌
制限給餌区	自由給餌	自由給餌区の50%	自由給餌

幼雛用飼料：CP22% ME3,100kcal  
 大雛用飼料：CP14% ME2,750kcal  
 ブロイラー後期飼料：CP18% ME3,150kcal

表-2. 発育成績

	体重 (g)			
	0日齢	10日齢	8週齢	12週齢
自由給餌	37	277	1,954	2,139
制限給餌	37	277	1,250	2,145

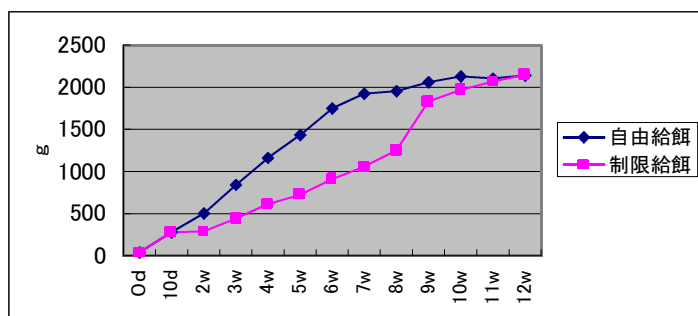


図-1 発育体重

表-3. 飼料摂取量(1羽あたり)および飼料費

	飼料摂取量 (g)			飼料代 (円)	
	0-10日齢	10-56日齢	56-84日齢	合計	増体kgあたり
自由給餌	320	6628	3934	362.3円	172.4円
制限給餌	320	4195	4516	295.2円	140.0円

幼雛用飼料 35.6円/kg、大雛用飼料 27.6円/kg、ブロイラー後期飼料 43円/kg

表-4. 解体成績

	ムネ・モモ 歩留まり	腹腔内脂肪 歩留まり	肝臓 歩留まり	筋胃 歩留まり	肝臓 脂肪含量
自由給餌	32.4%	1.42%	2.01%	3.36%	1.74%
制限給餌	33.5%	1.46%	2.17%	3.62%	2.52%

[その他] 研究課題名：特殊家禽の改良と増殖

予算区分：県単

研究期間：平成8年～

研究担当者：井室由紀、松下浩一、小林政雄、塩島敏夫

発表論文等：山梨県畜産試験場研究報告第49号掲載予定